

日本語でつながるためのオンライン留学での工夫

鈴木美穂

要旨

オンライン留学では、インターネットを介さないとなつなうことができないう制約を受け、留学生同士のおしゃべり、日本人学生との交流、教員とのやりとりなど、授業内容以外のコミュニケーションの機会が減少してしまう。オンライン上という限られた時間の中で、少しでも語学学習以外の「留学」に近いコミュニケーションの機会と経験を提共するには、意識的にその機会を作らなければならない。さらに関わるすべての人がそのことを意識して取り組めるよう丁寧な事前説明が必要となる。本実践では、筆者が実施した、日本語でつながる機会を増やすための小さな工夫を報告する。

キーワード

日本語コミュニケーション、オンライン留学、留学生、つながり

1. はじめに

コロナ禍により、留学の状況が大きく変わった。2020年5月1日現在の外国人留学生数は279,597人で前年に比べて10.4%減少した(文科省2020)。従来の留学をオンライン留学に切り替える大学が増え、オンライン留学に関する調査や研究も散見される。オンライン留学の交流やコミュニケーションに言及している研究報告では、「現地の学生と交流できること」など学生同士の交流について肯定的な意見が多かった(柿内2021)、「体験型の授業が提共され、講師や現地の学生との交流が活発に行われた」ことから研修に対する満足度が高かった(瀬尾2021)という報告がある一方、岩城・異(2021)が行った学生の留学に対する意識調査では、「オンライン授業と実際の渡航は全く別物」と捉えている学生がほとんどで、その理由として多かったのは「実際の現地での体験がないこと」であった。

留学生に限らず、大学では入構が制限され、多くの学部科目が遠隔授業となった。『大学時報』(2021)の「キャンパスライフとは何か」という特集では「オンラインでは補えないつながりの大切さ」が取り上げられている。学内では教室に限らず、食堂、サークル活動などさまざまな場所であつなうており、加藤(2021)は「学生が教室に集まることでお互いから得ていた情報の多さと大切さを痛感した」「人と人とのつながりは、科学技術では補いきれない」と述べている。

筆者がコーディネーターをつとめるオンライン留学プログラムも通常の交換留学プログラムの代替として開始され、留学生は自国から、Zoomを用いた同時双方向型の遠隔授業で日本語を学んでいる。参加理由は「日本語力向上」や「日本人との交流」が多い。

オンライン留学プログラムの初年度は、オンラインでも通常の留学と同等の学習効果が上がるような学習環境を整えることに力を注いだ。教員はオンライン授業の技術を身につけ指導にあたり、留学生はオンライン授業に慣れていくことで日本語授業の環境は安定し

ていった。学期末の面談では、日本語で授業を受けたことなどから、聴解力や口頭表現が身につく日本語力が向上したことを実感している留学生が多く、オンラインでも対面授業と遜色なく日本語授業が提供できるという手ごたえを感じた。しかし、「日本語で授業を受けることはさほど問題ではないが、日本語でのコミュニケーションの機会が少ない」「日本人学生と交流がない」「もっと LINE を使ってクラスメイトとやりとりしたかった」等、日本語学習以外の「日本語でつながる機会」を求める声も目立った。円滑なコミュニケーションのために、授業中のカメラオンのルールや LINE の活用などを、日本人学生とのコミュニケーションのために、日本語教育実習生の授業見学の受け入れなどを行っていたが、留学生は物足りないと感じており、十分に機能していなかったことが明らかになった。日本語力向上という面では、留学生が求めるものを提供できたが、日本語でのコミュニケーションやつながりの面においては、留学生が期待していたものが提供できていなかったのである。

通常の留学ではクラスメイトとのおしゃべりや教員との雑談、日本人学生との交流など、さまざまな授業内容以外のコミュニケーションが教員の手を借りずとも無意識に行われている。オンライン留学では、つながっているのはオンラインの授業中のみであるため、授業以外のこのような機会や経験を留学生が自力で得ることは難しい。初年度は留学生も教員もそのことを意識しておらず、対面と同じように簡単につながることができるという認識だったのではないだろうか。教員は言わなくてもできると判断し、説明不足となり、留学生は勝手にわからないまま学期末を迎え、「コミュニケーションが足りない」「つながらない」ということに気づいた。教員も留学生もオンライン上の限られた時間の中では、日本語でつながることが貴重な機会であるということ意識していなかったのだ。教員も留学生も、限られた時間の中で意識的にコミュニケーションの機会を作らなければならないこと、さらに、すべてのプロセスを説明し、意識化させていくことが必要であると痛感した初年度であった。

2. 本実践

初年度の経験から、2 年目は、日本語でのつながりの機会を増やすために、授業内容以外のコミュニケーションの機会を増やすこと、日本人学生、留学生、教員の「人」の部分意識的につなげることに力を注いだ。さらに、限られたコミュニケーションの機会を有効に使うため、事前に「何のために」その取り組みやルールがあるのかを丁寧に説明し、意識してもらうことを心がけた。

日本人学生との交流の機会を増やすため、教育実習生だけではなく、筆者が担当している学科科目の履修生にも声をかけ授業に入ってもらった。事前に留学生には、日本人学部生との交流について説明し、積極的に会話をするように伝えた。同様に、日本人学生には、オンライン留学では、日本人学生と交流する機会が少ない現状を伝え、カメラをオンにしてもらい、顔と名前が一致した状態で交流した。授業見学の時間より交流の時間を増やし、自己紹介、質問、ペアワークなど自由なコミュニケーションの時間を多く取り入れることを明確に示し、目的意識を持って取り組めるよう工夫した。交流後、留学生と振り返りの時間を設け、うまくできたこと、難しかったことを話し合い、次の交流会に生かした。「楽しかった」「日本人学生に会えてうれしかったが緊張した」等、留学生が明るい表

情で話していた様子が印象的で、実りがある交流であったことがうかがえる。初めての交流ではなかなか話せなかったり、話すことに積極的ではない日本人学生に戸惑ったりと、実際の留学でもよく起こるコミュニケーションの難しさなどもオンライン上でも経験することができた。同世代の日本人学生と日本語でつながる機会は授業とは異なる異文化コミュニケーションの貴重な経験になったようだ。

授業以外ではオンライン学園祭のイベントに参加する機会もあった。留学生の状況を知った他学科の教員から、イベント参加の提案があった。イベントについて事前に丁寧に説明し、留学生自身が申し込みを行った。イベントは卒業生と在校生の就職活動や留学についての話を聞いたり在校生と留学について話し合ったりする時間が設けられており、日本の大学生事情を知る機会となった。イベントで親しくなった日本人学生と LINE で連絡を取り合うようになったという留学生もあり、授業外でのつながりが広がった。

さらに、新たな取り組みとして、学期末に初級クラスと上級クラスの合同発表会を行った。どちらのクラスにも事前に留学の状況や日本語学習の状況などを説明し目的を明確にして発表会に臨んだ。各クラスの科目を担当した教員にも発表会について説明し、協力を仰いだ。授業外にもかかわらず多くの教員が出席し、質疑応答などを行った。発表後は留学生同士で自由に話す時間を設けた。留学生同士の交流の時間は非常に盛り上がり、日本語でつながることを実感し充実した時間となったようだ。日本語を話すことに対して「日本人に対しては『間違えないように気をつける』外国人に対しては『相手がわかるように気をつける』」と話す留学生もいた。

授業以外の自由なコミュニケーションの機会を増やすため、授業の中に「今週の1枚」という時間を設けた。これは留学生が考えたトピックについて、写真や物を提示し一人ずつ自由に話す活動である。学期の初めに何のためにこの活動をするのか丁寧に説明し意識化を図った。授業内容に関する意見や答えを話すのではなく、自由に話を展開できること、相手の話を楽しみながら聞けることなどから、おしゃべりに近い機会となったようだ。この活動で、留学生がお互いのことを知り、より親しくなったと話しており、日本語でつながる手段としても効果的であったと考えられる。一方で、「日本語の会話力向上のために授業で日常会話の練習やロールプレイなどの練習をしたい」というコメントもあり、オンライン授業では授業内容とおしゃべりを切り離すのは難しいということも痛感した。

LINE の活用については、LINE の役割、使用目的を明確に示した。教員や留学生同士はもちろん、交流会で出会った日本人学生とアドレスの交換をし、やり取りをしているという話も耳にしたことから、授業時間外にも人とつながるコミュニケーションツールとしても効果的に機能した。

3. まとめ

事前にやるべきことの目的や方法を丁寧にしっかりと提示した結果、留学生は貴重な日本語でのコミュニケーションの機会を有意義に過ごそうという意識を持ち、積極的に取り組むようになった。日本人学生、留学生同士の交流に関しては「もっと機会がほしい」という要望が出ていたが、日本語でのつながりを実感し、充実した時間となったからこそそのリクエストであると考えたい。日本語プログラムの担当教員、他学科の先生方、日本人学

生など多方面に声をかけ、機会を増やしたことで、それぞれの人とのやり取りからコミュニケーションの幅が広がったと感じる。

また、授業内容以外のコミュニケーションを意識的に増やしたことで、教室でのおしゃべりのような経験に少しでも近づけたのではないかと感じる。LINE の活用により、授業外でも日本語でコミュニケーションをする機会が増え、日本語でつながる人や日本語でつながる時間が増えたのではないだろうか。

限られたオンライン上で時間を無駄にしないためにも、些細なことでも省略せずに、毎回時間をとって活動の目的や方法を伝えることを積み重ねた。その結果、留学生、教員、日本人学生をつなげ、日本語でのコミュニケーションの機会を増やすことができたのだといえよう。

2年目の学期末は、日本語を話す機会が非常に多かったと話す留学生が多く、本実践の目的でもあった「日本語でつながる機会」は初年度よりも多くなったのではないかと感じる。

4. 今後の課題

授業内容、時差、時間の拘束などさまざまな要因からオンラインの授業内だけで完結するのは限界がある。やはり、今後は授業とは別の時間で留学生同士の交流会や日本人学生との交流会などを企画していく必要があるだろう。移動時間や場所の拘束がないというオンラインの利点を生かし、日本人学生が気軽に参加できるような機会を作ることも視野に入れたい。今回、他学科の先生方に留学生の現状を伝えたことから新しい機会を得ることができたように、多くの方々に状況を伝えて関わってもらうことで新たなつながりが生まれ、日本語でのコミュニケーションの機会が増えていくような取り組みを考えていきたい。今後も、小さな工夫を積み重ねて、オンライン交換留学プログラムが「留学した」と感じられるようなつながる体験を提供できるプログラムにしていきたい。

(鈴木美穂すずきみほ・目白大学・m-suzuki@mejiro.ac.jp)

参考文献

岩城奈巳・巽洋子 (2021) 「COVID-19 による学生の留学に対する意識変化—大学生への調査を通して—」『名古屋高等教育研究』 21, 187-206.

柿内利宏 (2021) 「「学びの継続」から「期待に応える」へ—亜細亜大学のオンライン留学—」『大学時報』 07, 76-79.

加藤恵津子・北條英勝・松下琢・宮間純一 (2021) 「キャンパスライフとは何か」『大学時報』 07, 18-33.

瀬尾匡輝 (2021) 「オンラインによる海外留学の可能性—コロナ禍におけるブルネイでのオンライン短期海外研修の実践から—」『The Journal of Worldwide Education』 4 (1), 4-18.

文部科学省 (2021) 「「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について」 <https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt_gakushi02-100001342.pdf> (2022年2月22日閲覧)